

---

# **世界の利、僕の利**

青龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の利、僕の利

### 【NZコード】

N8170E

### 【作者名】

青龍

### 【あらすじ】

今の世の中金がすべて。そんな風に言えたのは、今から約3000年前のこと。世界が核兵器によつて『人』と『人でない人』が存在してしまつた時の物語

## 序章・プロローグ

今の世の中金がすべて。

そんな風に言えたのは、今から約3000年前のこと。もう西暦も数えなくなつて約1000年。

世界は、過去のことを気にしなくなつた。その理由は過去に起きた戦争が、原因だ。

今から2000年前、世界から石油が少ししか取れなくなつた。少しの石油を巡つて世界戦争がおきた。

世界の国々全部の発展途上が終わつていたため、すべての国が核兵器を乱用した。

その結果、その戦争は一日で終了した。  
核兵器のせいで、たくさんの人が死に、たくさんの人が強力すぎる放射性物質により『人ではなくなつた』。  
大地が荒れ、植物が枯れた。

強力すぎた放射性物質を『未来への手』と。

この戦争は、今ではこういわれている『革命』と。

そう誰かが呼びはじめた。

進みすぎた技術のせいで、『人』自体貴重になつてしまつた。今で

は、『未来の手』よつて人はさまざまな形に変わつていった。ローマ神話出てきた二つの顔のヤーヌス。妖精と称されるエルフなど、さまざま形に変貌してしまつた。変わつていく人々は、『これは、人類進化のための革命』とまで言つた。

姿が変わつていくになつていくにつれて、だんだん脳の細胞の数が減つていつた。これの理由は、今だ証明されていないが、『変化による被害』と称された。しかし、変化するにしたがつてそれぞれ属性を持つ様になつた。これを俗に『神が与えてくれた力』と称した。

人は、そんな『未来の手』によつて変わつた人を『魔獸』や『魔人』と呼んだ。勿論、人は『魔獸』や『魔人』を愚弄し、卑下した。

愚かで醜い野獸だ。

と言つて。

『魔獸』や『魔人』の反感を買ひ。『神が与えてくれた力』を使って人間を滅ぼそうとした。しかし、同時に『魔獸』や『魔人』が神の反感を買つた。ある日、神が一人の人物に『ある能力』を授けた。

それは、『言靈』の能力を呼び覚ますもの。その能力は、字の意味を『心そこから』理解した時発動する能力。『言靈』を封印するための文字を『封字』といい。封字は、『巻物』にかかり、使つものが『心そこから』理解した時に書かれた文字を読み上げると、言靈の能力が発動され、巻物に書かれたことが『現実化』される仕組みだつた。

抵抗できる手段ができてしまった人は、『魔獸』や『魔人』と戦争を起こした。

これは、『魔獸』や『魔人』と人の生き残るための活殺自在の無駄な戦争

### 『海底捞月戦争』

と呼ばれた。

人と『魔獸』や『魔人』の無駄な戦争は100年も続いた。

この戦争が1000年前。今は冷戦状態が続いていつまた、あの戦争みたいのがおきてもおかしくない状態だ。

神は、『魔獸』や『魔人』に刃向かう方法を作った。一体何が目的かは、今の世の中には、分からぬ。

この世はなぜ生まれたのだろう。

なぜ、生き、苦労して生きていき、死ぬんだろうか？俺には、よく分からない。俺は、何が目的で生きているのだ・・・。この世界は、こういう疑問が充満している。世界は、どこに向かっているのだろう。そんな質問は、誰も答えられない。なんせ、自分じゃ何もできないから。そう、何も・・・。

俺の名前は、祈祷 きとう。昔の先祖は、色々長い名前だったが、『人』における部族差別がなくなつた今となつては、廃止になつた。これは、いい事なのだが、俺にとつてはどうでもいい。

俺は、この『名のない都市』と言う名の街に住んでいる。名は、あるが、ないので複雑だ。

俺は、この街でハンターをしている。ハンターというのは、『食材集め』ということでおもな仕事だ。

金の価値が無くなつてしまつた現代において、報酬は、『巻物』『情報』さまざまのものを貰う。

クライアントは大抵、『巻物』を作る『封力師』か、コックぐらいだ。

俺は、いつも通り仕事場に出勤する。俺の仕事場は、『普通のオヒイス』みたいなところらしい。

社長は、超長寿の『エルフ』と言う部族だ。革命後から年をとつて

ないらしい。まじかよ。

社長曰く、「『革命』が、起こる前の世界みたいな感じだ。昔が、懐かしい。」だそうだ。

『魔人』と呼ばれる部族は人間社会に残った部族が多い。一例として、『人』に一番近いエルフなんかは、未だに差別もうけず残っている。エルフと人の大きな違いは、寿命だ。エルフの寿命は、『2千年』らしい。

普通ならもう死んでいるはずなのだ。が、こうして生きていることは、微笑ましいことかもしれない。

「おい、祈祷。仕事がはいつたぞ。」

微笑んでいると社長から『氏名を受けた。

「また、俺つか。」

「ああ、お前だ。うちの社員は、俺入れて4人しかいないんだから、二人が出払つてしまつたらお前しかないだろう。」

社長が笑顔で話してくれた。うちの会社は、社員が4人しかいない。ていうか、『眷物』を読めるのはこの街に俺らしか居らず、毎日忙しい。

「で、今回の以来依頼は？」

「今回の依頼は、『魔物』退治だ。」

「げ、本当ですか？」

「二人きりでうそをついても仕方がないだろう。」

「ま、まあ。」

『魔物』退治とは、『魔獣』が自分の力に飲み込まれてしまい暴走してしまったのを止めるという作業だ。

「なんで、そんな難しくて珍しい依頼がこんなところに来るんですか？街のストライプは、どうしたのですか？」

「ストライプが何とかならないから、俺らに頼むのだろう？」

世界は、『海底撈月戦争』以来国という大きなまとまりが無くなり、『ストライプ』という戦闘になれた兵隊を育成する機関を各地域で作つた。

それと同時にストライプは、街を守るのを目的に作られた組織でもあり、一つの街に40人ほど送られる。ま、簡単に言えば、戦闘のプロだ。

「今も現場で戦っているらしいから、さっさといつて来い。」

「なんで、こんなことに・・・。」

俺たちは、ハンターと名乗っているが、実際は身体能力は並か、それ以下だ。体力ぐらいならつけられる。

が、頑張ってもストライプみたいな瞬時に反応できない。そんな奴が、現場に行つてもあんまり動けないとと思うのにな。俺は、『巻物』を三つ装備して会社を出た。

現場に行くと、20人ぐらいのストライプスが戦っていた。手が真っ赤に染まっている者。足が変な方向に曲がっている者。色々な人が、『やばい状態』だった。奥では、まだ戦っているらしいな。

「これは、大物だ。」

俺は、足がすくみながらも器用に冷笑してしまった。

奥に進むと、『ネメアの獅子』と言う名の『魔物』が暴れていた。奴は、名の通り『獅子』なのだが、皮膚が硬化し、どうやら自慢の剣が弾かれダメージを『えられてないらしい。それで、『あの』惨事か。なんてざまだ。』

「我が名は、祈祷。そちらを援護にきた。」

「おおおー」と声援が起きる。誰かが走ってくる。そして、俺に一

人の若い大男が話掛けてきた。

「我が名は、ライジ。ここに指揮官だ。」

こいつか、『あの』ざまの原因は。俺は、殺氣の帯びた目で彼を見上げていった。ライジは、黒人でまさにアメリカ人を思わせる感じの人だった。

『言靈』の封印を解くことができました。」「今から、奴を倒します。5分俺に近づけないで下さい。そしたら、

『巻物』の力を発動させるには、『巻物』

『お経』といふものぐらうりべて読まなくてはいけない。封字は、  
しいので、読み終わるのは一苦労だ。

わ、分かった。

それを聞いて俺はとこの木の一番上に登り、読み始めた。木に登るのは、雑音をできるだけ遠ざけるためだ。

၁၂၇

指揮官がいふと兵士の士気があがつた。彼は、この部隊のマードメ  
一カーらしい。

「グオオオオ！！！」

「グアアアアア！！！」  
ネメアの獅子の動き急にキレのある動きになつた。

第三回の癡の言ひ事

九

ライジが隊員の名前を叫びながら切られた隊員に近づく。感高ぶつ

ているのか、よく聞き取れない。

近づいたせいで、ネメアの獅子がライジを狙つ。そして、ネメアの獅子が手を高く上げて仕留める用意をする。これは、避けきれない。

「隊長、危ない！」

俺は、隊員の声を聞いて目をそらした。

グシャツ。

「・・・ぐ！」

「aign！」

ライジは、隊員が盾になつてくれたお陰助かつた。でも、盾になつた隊員は、ライジに何かつぶやいて絶命した。あの刀みたいな爪に切り込まれるのだ。ひとたまりもない。

「てめえ！いい加減に・・・」

そう言つてライジは剣を構える。・・・しかし、ライジは突つ込まなかつた。いや、突つ込めなかつた。ライジは、急に膝をついて気絶した。多分だが、これが奴の

奴の『神が与えてくれた力』。

「解！」

俺は、準備を整えた後、ネメアの獅子が、いるところにいざつしながら、必死に奴の『神が与えてくれた力』について考えた。相手を氣絶させるのか？殺すのか？一体なんの能力なんだ？

「とりあえず、ついてから考え方よ。」

そうつぶやいてから、1分間無心になった。

ネメアの獅子のところに行くと、すでに前線で戦っていたストライプのメンバーは、隊長を除いていなかつた。

絶命したか

食われたか。

「く、前線には、20人もいたんだぞ！」

俺は、思わず唇を噛んだ。

俺は、覚悟を決めて。奴の目の前にたつた。それは、いけなかつたかもしれない。

今から、戦うネメアの獅子を見てゾッとした。奴は、爪についていた血をおいしそうになめていたからだ。

「『魔獸』と『魔人』の元は、人間だ。」

そう言つて保護しようとする人間がいるが

人間のかけらもない。

そう思いながら『巻物』の力を出す。『巻物』は、人のイメージによって能力を發揮する。例えば、俺の持っている『巻物』は、水を基調としている。そのため、イメージによつて何にも形を変えるこ

とができる。

『巻物』を理解しないと、『巻物』を発動できない理由はこれだと思っている。

「水は、最強の能力」

つて社長は、言つ。どうだか、分からぬが少なくともそこら辺の能力よりマシなのがも知れない。

「グアアアア！」

そういうしないうちに、ネメア獅子が自慢の爪で攻撃してきた。暴走中は、頭に血が上った状態。そんな奴の攻撃なんて聞かない。余裕を持つてバックステップで避けた。

とりあえず、状況を整理しよう。・・・ここは、森。木や草などがたくさんあって『隠れやすい』。奴から逃げるのは、簡単だが今回の指令は暴走を止めるかまたは、殺害だ。俺は、草木の茂みに隠れて作戦を考えることにした。

さてと、・・・どうやって、どうやって攻撃してダメージを取れるか。問題は、あの硬い鎧みたいな皮膚。

剣を通さなかつた。・・・とりあえず、俺は『巻物』を発動させナイフをイメージする。そうすると、周りに出てきた水がナイフになつた。これが、イメージの『大切さ』なのかもしれない。とりあえず、移動しながら投げてみる。

「はつ。」

キン

そんな音がした。聞かなかつたことを物語る。ビーナス、奴の皮膚は金属でできているらしい。

多分、こっちに気がついただろつ。そんな気がしたので、奴の目に水を掛けるイメージを膨らます。そして、奴がこっちを向いた瞬間に水を目に掛けた。

「キヤン。」

そんな声が聞こえ・・・！弱点発見！田だ、田が弱点だ。俺は、移動しながらドリルをイメージさせる。『巻物』を発動させ、手を軸にドリルを作る。「よしー」とい、ダッシュで奴の目がけて走った。

しかし、俺は弱点を知った瞬間油断した。奴は、『神が与えてくれた力』を使えることを。

ゾクッ。この表現が正しいだろうか。一瞬だった。一瞬だけ奴の目と田が合つた。その瞬間底知れぬ恐怖が全身に走った。うお。この無言の重圧。

今にも食われるかと思えるぐらの殺氣。ライジが倒れるのも納得だ。これは・・・これは

ヤバイ。

俺の本能がそう伝える。今にも倒れそうだ。奴は、ゆっくりと歩いてくる。立つていられなくなる。膝をつく。手、背中、頭からすごい量の冷や汗が出てくる。・・・怖い。怖すぎる。何がこんなに駆り立てている？俺は、弱点を知っているんじゃないのか。・・・そう、弱点を。

そう思い奴に、精一杯の力を込めて近づこうとした。が、できなかつた。恐怖は、俺の四肢の自由さえ効かなくなっていた。足が震える。手があがらない。考えることができない。俺は、このまま動けないまま死ぬ。

「うわつあああああああ！！！」

そういうて、俺はしゃがみこむ。そして奴は、笑ったような顔をした。そして、アツパーをするように

「ガアアアア！」

そういうて奴が俺の肩を切り裂く。

「がああああ！！！」

ち、奴は、この戦いを楽しんでやがる。元の人間の本能は、健在つてことか。

血が大量にでてくる。死が待っているのかもな。

死。

その言葉が頭をよぎった瞬間、俺は、何も考えられなくなつた。・・・

・このまま死ぬ。俺は、まだ死にたくない・・・。

奴は、俺の近くに来てを上げる。まるで人を殴るかのように。俺は、急に涙が出てきた。

俺の人生が終わりを告げるのを感じたかのようだ・・・。

奴が、手を振り下ろしてきた瞬間、横から誰かに押された。

「よけろお！」

その声が俺を暗闇から引き戻す。

「あ・・・！」

横を見ると、気絶していたはずのライジがおきていた。

「が、はあ。」

そう言つて、血を吐く。体を見ると、横腹がえぐれたような傷ついている。重症だ。

「どうやら、助けられたな。」

「ぐ、そんなこと言つてねえで・・・早く・奴を倒しやがれ。」

「ああ。もう倒す。」

そういうつて、『巻物』の力でライジを運びながら移動する。

「これが・・・お前の能力か？」

ライジがたずねてくる。

「ああ。『水を制御する能力』だ。」

「これを使っていても・・・代償とか・・・は無いのか？」

「代償？」

「何の力を手に入れるにも何かしらの代償は・・・つき物だ。」

そういうことね。何かしらの代償か。

「そうだな、集中力をすぐ使う。あとは、・・・ない。」

俺は、傷の痛みに耐えながらも俺の命を助けてくれたライジに恩を返さなければならない。

ま、手が無いわけではない。が、もし失敗なんてしたらライジは死んでしまうだろう。

俺もライジも精神的にも肉体的にも限界に近いかもしない。そんな奴に複雑な作戦なんてできるのか？

・・・ここは、シンプルな作戦しかない。うまく、もう一つの『巻物』の攻撃が成功すれば何とかなるかも知れない。

「ライジ一瞬でいいから奴の気をひきつけてくれないか？」

「・・・分かつた。」

「頼む。」

「・・・了・解。」

そういうて、ライジは、獅子へ突っ込んだ。

「つおおおお！！！」

声に反応して、奴はライジを見る。そして、獅子はライジの方に目標を定めた。奴はあるで、

ライジを哀れみの目で見ている気がした。まるで、「自暴自棄になつた人」を見るような顔で。その後、奴は笑つたような気がした。

『獲物を仕留められる喜び』のように。

その時だけ、奴は油断した。多分だが、奴は俺の存在を忘れている。

目の前の飯にありつけるようじから。

「やあ！！！」

そしてその時を無駄にしないため俺は、『巻物』の力でつくった剣の形にしたやつ奴の目に放り込む。

「ギヤアアアア！！！」

見事命中…うまく入つてやつは苦しんでいる。俺は、奴が苦しんでいる間に3つのうちの一つの『封印』の『巻物』を取り出す。時間を無駄にしないためできるだけ早く封字を読む。

「…………解！」

そして、その言葉が引き金のように獅子の周りの地面から無数の鎖が出てくる。これが、『封印』の力だ。『封印』といつても動きを止めるだけである。

「キュウゥゥウ。」

そういう声をあげて、獅子が落ち着く。暴走がとまつたようだ。ていうことは、どうやら、封印は成功したようだ。この『封印』は、相手の動きをとめるまでに時間がかかる上に、逃げられやすい。とてもではないが、動いている相手に『封印』の攻撃を当てるのは、不可能。

今回のように弱点を突いて弱らせるか、普通にダメージを『えて弱

らせるかしてからしかつかえないらしい。

「・・・終わつた・・・のか？」

俺とライジは、とりあえず木の幹に寄りかかって座る。

「ああ。」

「よ・・・かつ・・・た。」

そう言つてライジは倒れた。

「え？」

バサ。ライジがあれの体に寄りかかつてくる。

「おい。まだ死ぬな！やつと、生き残つたのにしめなんてゆるさねーぞ！」

ゆすつてみたけど、ライジの出血がひどい。急いで病院にいかないと死んじまう。

そう思い、3つ田の『連絡』の『巻物』を出す。これは、ほとんど人が使える簡単な巻物の『装幀巻物』と呼ぶるもの一つだ。これが初步中の初步であるため、こいつに名前がつけられた。

『連1。』

この『巻物』封字はこれだけ。3つまで指定した公共の場所と連絡できる。

「ここは、名のない都市、病院一棟。」

「一人、急患だ。」

「了解しました。そのまま、力をだしつづけてください。」

それから30秒もしないうちにジェット機に乗つた救急の隊員がきた。

「さ、乗つて。」

そういうられ、俺たちはそのジェット機に乗つた。『巻物』の出現おかげで『進みすぎた科学』が後退した。

それは、いい事でもあるが悪いことでもあった。いい事というのは、『巻物』を制御しようとするために昔の技術が使われ、エネルギー

を最小限しか使わないようになったこと。悪いことは、『巻物』を使い今俺の乗つているジヒツト機などの機会の性能を百倍以上に上がってしまったこと。これにより、より戦争時に被害が出やすくなつた。

「あ、病院に着きましたよ。」

そう隊員にいわれた。ジヒツト機から降ろしてもらつ。隊員に運ばれている俺は、病院のマークを見てため息をついてから意識を手放した。

## 序章・祈禱（後書き）

こんにちは、作者の封雷光です。

この小説は、現代から3000年後のお話ですが、あんまり現代とかわりません。国というまとまりが消え、言葉が統一された世界です。地方で国の文化は残っているという設定も加えといてください。

質問等ございましたら、感想のところにお書きください。

更新は、半月ごとくらいですが、世界の利、僕の利をよろしくお願  
いします。

## 序章・始まり（上）

あれから一週間経つた。ライジは、全治一ヶ月となつたがまたストライプスに復帰することになった。

「祈祷、生きているか？」

そう言つて入ってきたのはうちの社長だ。俺はあの後、病院に搬送され全治一週間を言い渡された。

「生きてます。死に掛けましたが。」

「・・・それは良かつた。」

「社長、今之間はなんですか？」

「俺は、最高の笑みで聞いた。」

「・・・。」

なぜ黙るんだ、社長？

「仕事はいつ復帰できるかわかつた？」

「3週間ぐらいと聞いています。」

「ほお、給料は当分・・・」

なるほど、あの『魔物』退治の報酬を渡したくないのかあ。

「わかりました。あ、社長。」

「何かね？」

「『魔物』退治の報酬は下さいね。」

「・・・。」

なぜ、黙るんですか、社長？

「さて、そんな話は置いといて。何のためにきたんですか？お見舞いなんて柄じやないでしよう。」

社長は、社員を大切にしない。その証拠に、依頼の内容とそれ相応の報酬となればどこにでも社員を投入する。この前、うちの社員のキジが魔物がうじゅうじゅういる森に投入した。

「・・・わかつっていたのか。」

「はい。」

「最近他の街で『魔物』の暴走が頻繁に起きたようになつた。」

「・・・なに？」

「い、今なんて・・・？」

「だから、『魔物』の暴走の頻度が上がつたんだ。それもかなりにな。他の街で犠牲者が大量にでている。」

「！－！」

あんなのが全世界で？そんなことになつたら・・・。

「でだ、お前のようなハンターを全世界から徵収されることになつた。理由は、いわなくても分かるよな？」

「・・・このままだと、人類が滅んでしまうから。」

現在の人類は、10億人程度。その中でハンターは、1万人以下。街は一万ぐらいある。数字を見て分かるようにハンターのいない街がある。そんな街が、『魔物』の暴走を止められるとは思えない。つてことはハンターがない街は壊滅状態。人がもつと減つていく。正解だ。今から起こる事くらい予測がつくだろ？」

「『魔物』の暴走をとめる。」

「または、『魔物』を全員殺す。」

社長が言つた。

「・・・そういう考え方もありますね。とりあえず、どこに徵収されるんですか？」

「旧ブラジル地区、オーストラリア地区、南アフリカ地区だ。」

「『魔物』のすくない地域ですね。」

「ああ、これ以上ハンターが死なないようにするためだ。」

「・・・。」

『革命』のとき落とされた核兵器は、北極に落ちた。『未来の手』に、近ければ近いほど人の形が無くなつていいく。そのため、北に『魔物』が集中し、南に人間、赤道あたりには、『魔人』が集中した。

「いつでればいいですか？」

「明日からだ。この街も時期に破棄される。」

「・・・なに！」

「この地域は、旧日本地区。『魔人』が多いとはいえ、いつまた『魔物』が暴走するかわからねえ。」

「・・・」

「しょうがないか・・・。

「いいか、会社にある12の『巻物』をどんな事があつても守るんだ。」

「わかった。」

今会社にある『巻物』は『装幀巻物』を除いて12ある。あるが、

その中の4つは『究極の巻物』と社長が呼び、封印している。

「もう皆で準備を終わらせている。必要なものだけいえ。お前の家から持つてくる。」

「そんなものはない。」

俺には、家族がない。理由は簡単。父も母もハンターで『魔物』退治のとき一緒に死んだからだ。一人っ子だった俺はいく当てもなく一人が働いていた会社に引き取られた。その後、その恩返しか社長の会社で働いている。

「・・・そつか。」

次の日、早朝に病院を抜け出すと3人の会社の同僚が玄関にいた。

「おはよ、祈祷」

「おはうございます、祈祷君。」

「早いな。」

彼らを順に説明すると、一番最初に話しかけてきたのは一番若い京子だ。彼女は、長い髪の純日本系の顔立ち。社長から言うと「巫女の服を着たら似合う女」らしい。因みに、俺も純日本人で「てんぱー」というものらしい。

次に、話しかけてきたのは見るからに優しそうな顔をしているリンだ。彼女は髪が茶髪で目が蒼いところみると色々な人種が混じつ

てこるらしい。最後に話しかけてきたのは、親友で幼馴染のキジだ。彼は、リンの妹で、髪の色や瞳の色がそっくりだ。俗にいう「いきめん」といふものらしい。

・・・まったく、社長のこいつている言葉はまったく分からない。

「おはよう、皆。」

「・・・傷大丈夫なのか?」

そうキジが話しかけてくる。・・・ん?

「・・・大丈夫だ。というか、痛みがない?どうこういとだ?」

そうこいつて包帯を取つてみると

「!傷がなくなつてこむ。」

「! ! ! ! !」

一体何が・・・。

「皆さん待つてください。」

そんなこと考へ得ていると声が聞こえた。ん、この声は?声の方を向くとライジが立っていた。

「僕も連れてつてはくれませんか?」

「・・・だめだ。傷が治つているならともかく、傷が深かつただろ  
う。傷を負つたものにこられても足手まといだ。」

「それが・・・傷がなくなつていてるんです。あなた同様に。」

「・・・。」

どうこいつなんだ。なぜ、俺やライジの傷が無くなつてこむんだ・  
・・?

「戦力が増えるのは歓迎だ。誰かは知らんが連れていこいつ。  
そう考へていてるとキジがそう切り出した。

「おい!そんなこといつて・・・!」

俺が反論する。

「良いに決まつていいだらう。その身体つき、兵でもやつていたの  
だらう。」

「はー。ストライプスの隊長をやつしていました。」

ライジが淡々と答える。

「ほお、益々好条件ではないか。」「でも……。」

「はいはい。でも、だつては禁止だ。そんなこといついたら話が進まない。簡単に奴が戦力になれそなうなら連れて行けばいい。今見てどう見ても使えるし、戦力になるだろう。」「……。」

「沈黙は肯定とみとめる。」

「……つ。じゃ、聞かせてくれ。何で一緒にいきたいんだ?」

「……『友達』が危険なところに行くのを見送るだけなんて嫌なんだ。」

「おいおい、俺とお前はまだ一週間の仲だぜ?」

「……それでも、『友達』が危険なところに行くのを黙つてみてるのは嫌なんだ。僕の友達は、『魔物』が暴走した時に僕が友達と言える人は全員死んだ。あの時、俺は何も出来なかつた。……いや、しなかつた。自分が死ぬのが怖くて。動けず、震えていた。皆が死んでいくのを見て、とても自己嫌悪に陥つたよ。……僕はもう嫌なんだ、あんなことは。もう自分だけ黙つて見ているなんて、出来ない。」「……。」

「繰返すが、沈黙は肯定と認めるぞ?」

キジが確認する。

「……。」

「じゃあ、よろしくな。俺はキジだ。」「……。」

「よろしく、僕の名はライジ。ストライプス第50番ライジ曹長です。」

そう言つて特有の敬礼をする。「これは、地方の軍とストライプスと間違えないようにするためと俺は考える。」

「よろしくお願いしますね、ライジさん。私はリンです。」「よろしく！俺は、京子。」「……。」

「ひら、京子ちゃん。俺じゃないでしょ？」「……。」

「いいじゃん！気にしない気にしない。」

「はあ、まつたく。」

「

といつもの様にリンと京子でコントを繰り広げた。

「ま、そんな」とは置いといて。皆、俺の『巻物』持つてきてくれた？』

「ああ。ほらよー。」

そう言ひて、キジが一つの『巻物』を投げてきた。

「ありがとう。」

そう言ひて『封印』と『水』の『巻物』を受け取る。受け取つたら俺はいつもの様に装備する。装備といつても、服につけてくる専用のポケットにいれるだけだが・・・。

「じゃ、いきますか。」

そうキジが言ひ。

「おう。」

そつと言ひて俺等は、歩き始めた。

もつ戻つてくることの無い街。そう考えると自然に涙が出そうになる。街を歩きながら色々な思い出が甦つてくる。良い思いでも・・・嫌な思いでも。他の街に行つたことないので、不安と好奇心でいっぱいだった。「どんな風何だろ?」とかぐらいしか思いつかなかつたけど。

そんな事考えているとキジが話しかけてきた。

「・・・この街ともお別れだな。」

「ええ、そうね。色々なことがあつたわ。祈祷が木から落ちて大怪我して・・・。」

「そうそつ、祈祷が大昔のホラー映画見て怖いつて大泣きしたり・・・。」

「そうだね まつたく、祈祷つたら・・・。」

「ストップ。皆さん俺の悪い思い出しか思いつかないの？」

「「「うん。」」

「・・・。」

三人ともハモリやがつた。しかも、ライジが笑いこらえてるってどういうこと?お前助けるよ。

「ま、そんなことはどっかに置いといて。本当に色々な事があつたわね。」

多分皆同じ事を考えているのだろう。俺とリン姉弟と京子は親がない。行方不明か死んでいるかのどちらかだ。

リン姉弟俺と同じく親が死んでいる。リン姉弟の親が病弱で、母親がしんですぐ後追うように死んだらしい。

問題なのは京子で。ある日会社前に京子が倒れているのを俺が見つけた。見ると傷だらけで何があったのか聞けないぐらいだ。実際今も聞けていない。

「ほらほら、みんなで白けた顔しないの。張り切つていこう!」

と京子が皆を元気つける。

「そうだな。」

とキジも続ける。

「じゃ、いきましょうか。」

とリンも続く。

「じゃ、行きますか。」

そういつた瞬間。

「じゃあな、お前ら。」

つて後ろから声が聞こえた。が、皆振り向かない。それが、『礼儀』だからだ。言い訳だろが何だろ?が無視する。悪い思いばっかりしててきた。だが、そんな日々でも小さな幸せがあつたしとても大切だった。

「・・・死ぬなよ。」

俺たちにとつては、彼はとても大切な『親』だった。

「な、キジ。俺たちどこに向かうの？」

俺は、旅立つてすぐ、キジに質問した。

「空港に向かつて飛行機をチャーターしてオーストラリア地区に向かう。ま、オーストラリアに着かん限り次の目的地が分からぬ。」

「え、社長に聞いてないの？」

「おう。」

自信満々に言われてもなあ。

「ま、オーストラリアの空港できけばいいさ。」

なんと能天氣な・・・。

「・・・わかった。でもさ、この森通らなきやだめ?」

「ああ。この森通らないと大分遠回りになる。」

「なになにい? 祈祷びびってんの?」

「どんまいです、祈祷君。」

「お前ら俺に一斉攻撃やめる。」

おいおい、なんでライジが笑つてるんだ?せめてこらえろよ。話を

戻すが、俺らの目の前にはライジと戦った森が広がっていた。

「一日歩けば夕方には抜けられるから大丈夫だ。」

キジが補足する。

「とりあえず、いくか。」

「そうですね。」

「「おー!」

「・・・。」

「どうした、ライジ?」

キジが聞く。

「いや、なんでもありません。」

ライジが丁寧に答える。

「・・・・そうか。」

キジは、半信半疑で頷いた。

森に入つて行くと、この前の戦いの跡が痛いたしくのこつていた。ネメアの獅子と戦つた所に近づくにしたがつてライジが拳動不審になつていく。

「ライジ、氣にするな。ネメアの獵子は……」

「エロワフナ、ナーナラノコ、ニア」

〔二〕

今なんて  
・  
・  
・  
！

•  
•  
•  
!

- ! !

リンとヨシカヲイシの異変に氣付く

ヒューマン

「ランジ、ジのソニンギー」

10

フイジが、聞いても困るが、おの、アラカルト一覧。

ライシが大声で笑し始めた。

お前ら本当に黒魔だな!!!!!!この人間の異変は複数がないくて

Γ Γ Γ Γ ! ! ! !

そう叫んだ瞬間。皆ライジから一斉に離れて『巻物』を開きながら

『封字』を読む。

「は、お前らの『読む』時間は前回の戦いで把握している。後3分程度でつくからこいつと遊んでろ！」

そういうたあとライジが剣を抜く。

「いいか、リンと京子は『読み』続ける。俺と祈祷でライジをとめる。読み終わったら今から来る敵を始末してくれ。」

キジが一旦読むのをとめて三人に指示を出す。三人が皆をみて頷く。キジは続ける。

「祈祷、ライジに何があった？」

「ライジと俺は一週間前に『魔物』退治の依頼でネメアの獅子と戦つたんだ。多分操っているのは奴だ。」

「・・・」

キジが黙り込む。だが、なぜライジが操られているんだ。何が原因なんだ？ そう考えているとライジが俺に突っ込んできた。

「おらおらおらー！ しねえ！！！」

大振りで攻撃してきたので軽く避けた。

「当たるかつ！」

前転で避ける。

どかあーん。

気のせいだろうか。変な音がした。

「お、おい、祈祷。クレーターが出来てるぞ・・・。」

キジが震えながら言った。見ると直径5cmほどのクレーターが出来ていた。

「ま、まじかよ。早めにとめねえと、こちらが危ない。いくぞ、キジ！」

「おうー。」

そう言って二人が挟み込むような陣形をつくる。

「「覚悟、ライジー」「

見事にハモった。

「　　解！！」

俺とリンは、長い長い封字を読み終わり、敵の討伐に向かう。  
「京子ちゃん、あなたと私が唱えた『巻物』は属性から言って真逆  
なの。だからあわせないと打ち消しあっちゃうわ。」

リンの言う通り、俺の『巻物』は『風』。リンの『巻物』は『土』  
だ。土は、風の通りを塞ぎ、風は土を風化させる。

「わかつてゐる。こんびねーしょんつて奴をすればいいいんでしょ？  
「社長の言葉を借りればそうこうことね。」

「ガルルルルルル！！！」

「　　！　　！」

二人で喋っていると、俺とリンの前に戦うと思われる敵が現れた。  
硬そうな皮膚で全身が覆われていて片目が塞がっている。  
一見、獅子(ライオン)に見えるが太陽の光に浴びるたびに光るところをみると  
普通じやないことが分かる。

「じゃ、いくわよ、京子ちゃん。」

「わかつた、いつでもいいぜ！」

「こら、いつでもいい『わよ』でしょー！」

そんな雑談しながら戦い始めた。

## 序章・始まり（上）（後書き）

どうも、作者の封雷光です。

今回の話は下手したら一万五千字超えてしまいそうに一回に分ける事にしました。長くて申し訳ございません。

さてと、今回のお話ですが、急にメンバーが増えてしまつて混乱する方もいる（と思いたい）のでキャラの自己紹介を一話につき一人していきたいと思います。

じゃあ、まずは主人公（？）を

名前：祈祷 19歳

性格：おっちょこちよい、ほとんどのことに面倒がる。  
友達のこと第一に考え方の死を見るのを人一倍嫌う。  
まんだか、いじめたくなるオーラがある  
外見：純日本人。背が高く、なにげかつこいいが本人  
が気付いてないので普通。

## 序章・始まり（中）

「キジー、どうにかならないのかよっ！」  
バックステップを使って、うまくライジの攻撃を避ける。

「なるか。」

キジもキジで独特的のステップをつかって避けた。

ドゴーン！

すごい大きな音が響き渡る。その音を聞いて動物たちが逃げていった。

「くつくつく、流石に手も足もでないか！ぐふふ、人間など弱い下等生物なのだ！」

ネメアの獅子に操られているライジが、天を向いて不気味な笑いをした。

「そんな黒人の器で言われても……。」

キジは、若干不慣れなようだ。ま、俺もなれないが。  
「このまま、防戦一方だと確実に長引くぞ？」

「そのようだ。」

「しかも、則られている状態とはいえ元は人間の身体だ。あんなことをしていたら……。」

「だが、攻撃したらライジにダメージが残るぞ？」

「じゃあ、どうすれば！？」

「リンと京子に任せせるしかないだろう。」

「……何にも対策が立てられないのか。」

結局、人任せになってしまったらしい。

「頑張ってくれ。」

そう願うしかなかつた。

「今よ！」

「OK！」

合図と同時に攻撃する。

「遅い！」

しかし、後一歩と言つてこゝで避けられる。私の『土』はコントロール重視に対し、京子ちゃんの『風』はスピード重視。

「もー、京子ちゃん。もーと、遅くしてよー。」

私の『土』は、京子ちゃんの『風』のスピードについていけない。無理だよ！これでも精一杯スピード落としてんだから…

「ふふふ、味方同士でいがみ合つてどおする？」

ネメアの獅子が片手を挙げながら突っ込んできた。近づいたた振り下ろす気だ。

「ぐ、やあ！」

私は、地面に手をつけて周りの土を盛り上げて京子ちゃんと一緒に守る形にする。

「流石リンだね。コントロール抜群じゃん」

「この壁は一分も持たないわ！急いで次に。」

「わかつてる。」

そう言つて、目を瞑つて集中する。私は細長い塔を作るイメージを頭の中に描く。

獅子が、刺さるよつた大きな塔。

「準備OKだよ、リン。」

「分かったわ！」

目を開き壁に触る。そして、爆発するイメージを描く。すると、見事に壁が全方へ爆発した。

「キャン！」

そんな声をだしながら

「お、可愛い声出せるじゃん！」

京子ちゃんは、頭の上にためていた大きな風で出来た玉を獅子に向かって投げる。しかし、獅子もあたらなによつに立とひとす。

「逃がさないわ！」

さつきのイメージを呼び戻して、奴の四肢に貫かせる。が・・・

「な・・・！」

貫くじろか、『土』をあげたのにもかかわらず削られてしまった。  
それほどまで奴の皮膚は

「硬い・・・！」

奴は当然とした様子で、すぐさま立ち上がりて避ける。

「どーやら、リンの『土』は一切効かないらしいね。」

「そうみたいね。」

奴の攻撃を避けながら戦つ。『巻物』を使うのに馴れているとは言え、正直長時間使えない。

「取り合えず、作戦考えないとまずいぞ。」

「そうね。いつも通りという訳には行かないみたいね。」

考えて、私。こうこう時こそ、頭を使わないと。

「どうするよ？」

京子ちゃんがキツそうに尋ねて来る。

「そうね、取り合えず弱点を見つけないと。」

視線を獅子に向ける。硬そうな皮膚で全身が覆われていて片目が塞がっている。一見、獅子に見えるが太陽の光に浴びるたびに光る皮膚。ん、待つて。 そういえば。

「京子ちゃん、祈祷君はこの敵と戦つてたつていつてたわよね？」

「え?うん。」

「・・・。」

つい、ニヤリと笑つてしまつ。

「私の賭けに乗つてくれる?」

「いいよ!」

京子ちゃんもニヤリと笑つた。

「じゃあ、まず私たちを『風』の上に乗つて移動すわよ。」

「そんなこと出来るわけないぜ？」

「京子ちゃん、その言い方おかしいわよ？」

「え？」

「じゃあ、まず太い板をイメージして。」

「うん」

京子ちゃんがイメージしている間に私は、長細い大きな壁獅子にぶつけ、距離を取る。

「く、小賢しい！ 我にそんな攻撃きく思つていいのか！」

獅子は、だんだん苛付いて来ているようだ。

「できたよ。」

「なら、『風』でその板を作つて。」

頼むと京子ちゃんの周りに『風』が集まる。

「何をしたいのか分からんが、ふざけるな！――！」

獅子が突っ込んで来る。

「出来たよ！」

「じゃあ、乗つて！」

そう言つて私と京子ちゃんは、『風の板』に乗る。獅子が木を使つてすばやくこっちにくる。

「上がつて！ 早く！」

「分かつた！」

ひゅうう！――変な音がなる。が、見事、上へ上がる事が出来た。

「こんな使い方があるなんて・・・。」

京子ちゃんはびっくりしている。

「きっと馴れればもう少し小さくても上がる事が出来るようになるわ。さてと、次行くわよ！」

「次？」

「そう、次よ。」

そう言って、ネメアの獅子が私たちを探しているうちに作戦を京子ちゃんに伝えた。

「キジ、流石に疲れてくるな。」

「同感だ。」

キジと俺は、長時間の防戦に耐えていた。武道派ではない俺らにとつて結構キツイものだ。一発当たれば重症の攻撃だし、当たり所が悪ければ即死の攻撃だ。そんな状態の中に放り込まれたら、きっと疲れるだろう。

「なあ、やっぱいつまでは氣絶させるまでの攻撃したほうがいいんじゃないかな？」

俺は、息を切らしながらキジに話しかける。

「だな。」

彼も、エネルギー消費は最小限に押さえたいらしい。

「つるせえーー！」

ライジが、俺に標的を定めラリアットを仕掛けてくる。もともと、ストライプスという軍関係の仕事で鍛えられている。それに加え、『魔獣』に操られて、普通の時よりも本能が鋭くなり数倍強くなっている。それだけならまだいい。さらに、憎悪が心の割合をほとんど占めていると思われる。やっぱり、憎しみや怒りは、通常の囮りきれない力が生まれる。もう、『普通』には戻れない領域に達している。

「つく！」

そんな攻撃を側転で何とか避けたことに成功した。靴にちょっとかする攻撃。俺は、油断した。『かすつたぐらいじゃあ大丈夫だろう』と。しかし、そんな憶測は所詮憶測だった。

「がああーー！」

ちょっとかすつた靴は吹っ飛び、俺は、三回転ほどして地面に付い

た。そう『かすつただけ』という憶測は『人間』だけに通じるもの。ライジは、もうその域からはみ出している。そう、『すでに人間ではない』。

「大丈夫か！」

キジが叫び、ライジに向かつて飛び蹴りを放つ。俺に気をとられていたライジは、『人間の器』なため吹っ飛んだ。

「ぐ、かすつちまつた。」

「立てるか？」

「ああ。」

足に激痛が走る。青くなっているに違いない。が、そんなことで立てないなんてハンターは甘くない。そんなのを引きずつている人が待つてているのは死だ。

「ああああ！！！カスドもが！！！」

ライジは、キレた様に立ち上った。そして、キジにめがけてパンチを放つた。が、軽々とパンチをキジによつて避けられた、地面へと激突した。地面は、彼の生き良いを受け止めきれずひびが入った。

「てめえら！呑気に話してんじゃねーーー！」

ライジの檄が飛ぶ。

「やつぱ、すげえ力だな。」

「ああ、『巻物』を使ってもあそこまでは無理だな。」

「やつぱ、『巻物』使わんとちときつこか。」

キジも限界を感じているらしい。

「じゃあ、どっちがいく？」「

「祈祷、お前言つたほうがいいかもしれん。」

「なんで？」

「俺よりお前の方が読む時間短いし。」

「わかった。じゃ、足止めよろしく！」

俺は、できるだけ明るくいった。ポーチから『巻物』を取り出しながら遠くに逃げた。

「ふん。早くしろよ？」

後ろで、小さい声が聞こえた。

「お前俺を舐めてんのか？」

「は？お前なんぞ俺一人でもいけるわ」

・・・こんな操られるほどの精神の持ち主が俺らに勝るなんて思え  
んがな。

「くそがあ！てめえ、防戦一方の癖に舐めたこといつてんじゃねえ  
ええ！！！」

そんな声に、つい力チーンと来てしまう。

「黙れ！お前の攻撃当たれて居ないくせに！？」

「がああああ！！！」

第一ラウンドが始まった。

「いくよ、京子ちゃん！」

「おう！」

私と京子ちゃんは作戦会議を終えた後、自分の集中力を高めていた。  
これからやる事は、いつもと違ったことをするし気を引き締めなく  
てはならない。

「いたわ！1時の方向よ！」

「OK！」

私は、自分の本能ができるだけ鋭くしながら、奴の所に向かう。『  
土』の能力は、京子ちゃんの『風』や祈祷君の『水』と違つて地面  
に触れなくてはならないから不便だ。『風』に乗つて、上に上が  
つている時点で私の能力は無意味。だから、集中して能力を使つて  
いる京子ちゃんの目になつて上げなくてはならない。

「田標がじゅりに気付いたわ！」

「じゃあ、足止めしないとな！」

京子ちゃんは、カツと田を見開き闘志を剥き出した。その瞬間、京子ちゃんの手に『風』が集まっていくのが分かる。『巻物』を使うものだから分かるのかもしれないが、なぜか『力』の集まり具合が直感だか分かる。

「はあ！」

そう叫つて見えないカッターを獅子にぶつかる。だがキン…っという金属音とともに防がれてしまった。だが、ここまで計算のつかだ。

「じゃあ、行くよー！」

京子ちゃんの掛け声とともに『風』の板から下りる。

「よしー！」

私が、命図のよつ趣をだす。獅子は、降りたり上がりたりしていて混乱氣味だ。

「今よ、京子ちゃんー！」

「うん。」

命図と同時に術を出す。私は、『上』から、京子ちゃんは『下』から。

「……！」

「あなたは、私たちを馬鹿にしてはいけません。あなたの近くにトンネルを掘つて、そこに京子ちゃんの『風』が通れば簡単にこんな事出来るわ。」

「そうね。俺の『風』にリンの『土』をプラスせねば何処でも運べるつーのー！」

「なーしまつー！」

ドカーンー！

私と京子ちゃんが放つた攻撃が見事顔に命中した！

「よっしゃー！」

「やった・・・・！」

私たちはついがガツッポーズを同時にしました。

「でも、リン。なんであれが食らうってわかったの？」

「ネメアの獅子の目にダメージが残っていたでしょ？」

「うん。」

「アレは、最近出来たあとだった。だから、多分だけど祈祷君がつけたんじゃないかなって思ったの。」

「へえ。」

「それに、弱点があるみたいなの。」

「弱点？」

「『魔獸』と呼ばれる種族は、本来『知能』と『本能』が兼ね備えている種族とされているわ。一見強そうに見えるけど、実は、そうでもないみたい。『本能』とは、動物個体が、学習・条件反射や経験によらず、生得的にもつ行動様式。特に防御本能は、生死に関わる大切な機能でしょ。でも、その機能は獅子の頭の中とても壁が出来てしまう事になるの。『知能』というなのは壁がね。人間のように物事で、考えようとする生物と違い、『野生』という名の社会で生きているネメアの獅子にとって『本能』が強くなるはずなのよ。でも、さつきの感じを見てみれば分かるように物事で考えてしまっている。まるで、人間みたいにね。本当は、『本能』で動く生物なのに、『知能』で考えてしまつ。そんなことしていたら、一つの考えが同意に起きて、錯乱してそまう。その錯乱のせいで思考が一時的に止まるのは必然なの。」

「????」

どうやら、京子ちゃんには、理解できていないみたい。

「簡単に言えば、馬鹿だから私の罠にはまつたの。」

「ただの馬鹿じゃん。」

「そうだよ。」

あんな攻撃、本当ならバックステップか、サイドステップで避けられるもの。でも、出来るはずが無かつた。『知能』がそこらの生物より良いからって、馴れない頭を『人間みたい』に使って考えなが

ら行動しようなんて無理に決まっている。下手に頭を使わなかつたら、『本能』というなの『生き抜く力』が私たちを飲み込んでたかもしれない。

「じゃあ、リン。祈祷のところいくか！」

「京子ちゃん！『いくか』じゃなくて『こいつよ』でしょー。」

「気にしない。」

「気にしなさい。」

そう言つて、獅子に背を向けた。が

「ぐ・・・ぬるー。」

「——」「——」

奴は、口からものすごい量の血が出ていた。しかし、それを感じさせない感じで立ち上がった。

「くつ・・・！」

油断した。ちやんとトドメを刺せたか確認しどくべきだった。緊張と解けてしまつた瞬間、『巻物』の効果も切れてしまつている。京子ちゃんも予想外だつたらしく、『巻物』の効果を切つていた。

「グルル・・・浅はかな娘どもだ。我があの程度で死ぬとでも思つたか！」

ネメアの獅子は、ゆっくりと近づいてくる。この距離じゃあ、『封字』を読む時間は絶対に足りない。しかも、ダメージはあるとはいへこの余裕。私たちを食らうくらいできるであろう。

「京子ちゃん！私が、相手をするわ！祈祷君たちを呼んできて！。」

「そ、そんな」と――

京子ちゃんは、声を震えながら叫ぶ。

「それでも、年長者よ。最後くらい、いい事してあげたいじゃない。」

「・・・ひ。」

京子ちゃんから涙が流れそうになる。

「はやく！――

「・・・絶対生き残つていてね！」

「わかった。」

そう言って、京子ちゃんがダッシュしてこの場を立ち去る。

「ほほお、チーム愛か。」

「『魔獣』の癖に気使ってくれてありがとう。」

「我は、器が大きいのでな。あの小娘はお主の覚悟に免じて助けてやるわ。」

「そう、それは良かった。」

「では、おとなしくしとれば楽に逝かせてよるぞ。」

「あらあら、余計な心配はしなくても結構よ。私、抵抗しないなんていつ言ったのかしら?」

そう言って、バックの中から、コンバットナイフと、長剣を取り出す。そして、右手には長剣。左手には、ナイフ。これが、私のスタイル。両利きの私には、もってこいのスタイル。だけど、この魔獣バケモノには皆無。うまくいっても相討ち。悪ければ、何にも出来ずに死ぬ。・・・それだけは、避けたい。どうせ、終わるのならこの『魔獣』を退治しよう。そう心に決める。

「はああーー！」

私は、長剣を大きく振り上げ奴を斬った。が、キンという音と共に空しく折れてしまった。

「ふん、こんなもの効かぬわ！」

がはは、と大声で笑い始めた。その声で、ぜんまいのねじが切れた人形のようにガクンと地面に膝をつける。

「最後の抵抗もこの程度。やはり、人間なぞ弱きものよー。」

「くっ。」

分かつてはいた。だが、現実を突き付けられるは、ここまで悲しいものなのか。ナイフほどまで折れてしまった長剣を見て、いろんな思い出が走馬灯のように駆け抜けた。

こんな風に思うなんて死ぬ前のようなだ。  
いや、死ぬ前なんだ。

「あはは・・・。」

っこ、笑いが出てしまつ。わひと、実感がないからだらう。

「では、地獄でな！」

そう言つて、奴は手を振り上げ爪を立てぬ。逃げれるわけも無く、頭が真っ白になつて田を走りと駆つた。

私は、じにじに氣を失つてしまつた。

## 序章・始まり（中）（後書き）

ここにちは、作者の封雷光です。

まずは、更新について読者の方に深く謝罪したいと思います。楽しみにしてくれている読者の方々すいませんでした。正直いって、テストやら何やらで更新が伸びに伸びこんなに遅くなってしましました。

この小説は、本気で書いています。ので、この様な自体が再度起ころかもしれません。が、必ず更新します。ので、最後までお付き合い頂けたら幸いです。

## 序章・始まり（下）

目覚めると、空は黒く月が独特の光を放っていた。

「あ・・・れ？」

「起きたか、リン。」

「きじ？」

「大丈夫かよ、リン。」

「京子ちゃん？」

「どうやら大丈夫なようだな。」

京子ちゃんは、いつもの口調でしゃべる。そういえば、私は、どうして寝てたんだろう？ そう考えながら、ぼーっとする。しかしそれも時間が経つにつれて頭が覚醒してくる。ネメアの獅子と戦つて、京子ちゃんを逃がして……あ！

「あれ？ 私なんで生きてるの？」

そうだ、私恐怖で途中で氣絶しちゃったんだ。

「それは、祈祷が助けに入つたんだ。」

「え！」

そういうえば、祈祷君が居ない。

「じゃあ、祈祷君は何処に？」

「奴ならリンの後ろにいる。」

「き、祈祷君？」

それを見て振る向くと、祈祷がかなりの傷があつた。右手と右肩に包帯が巻いてあり、どちらも重症。あとは、頭、左足にも巻いてあるが大丈夫そうだ。でも、どうしてこんな事に……。

「俺と祈祷は、ライジと戦つてたんだ。」

キジが、焚き火の火を強めようと枝に火の中に入れる。私の顔を見て気遣つてくれたのだろうか？

「その中で、祈祷は足を怪我したんだ。『普通』なら、大丈夫だつ

たんだがライジは、ネメアの獅子の力でかなりの力を増大させていたんだ。それで、祈祷は足にダメージを負ってしまったんだ。

「・・・」

「そこで俺は、祈祷に逃げてもらおうと、『巻物』を詠んでくるよういったんだ。その後は、」

俺は、数時間前のこと思い出し始めた。

「グアアアア！」

ライジが大分可笑しくなつて來た。そうだな、『魔獸』に近づいてきたと言つても過言ではないだろう。

もう、人間とはいえない。それだけは、分かる。だけど、數十分前に出会つたとはいえ元人間だったのだ。心中で大きな渦が出来ていることは把握できた。

「ライジ！ 目覚めろ！」

頭の中が真つ白になつていた。気付いたら、そんなことを叫んでいた。なぜ、叫んでいたが自分でも分からない。今のライジの姿と數十年前の姿が心中で重なる。目を瞑りたくなるような事実。でも、目を背けてはいけない。前の頃のライジの意思が、違うからだ。俺は、覚悟を決めた。

「お前の心の中の敵を倒してやる！」

俺は、決闘の時に叫ぶように言い放ち、バックから愛用しているトンファーを取り出す。短いく、一見頼りないような刃物は今の俺の命を左右する剣だ。が、俺が構えた瞬間、ライジが頭を抱え、後ろに吹っ飛んだ。

「があああああ！」

ライジの悲鳴が、森に響き渡る。

「ぐああああ！」

ライジは、地面にしがみ付きはじめた。

「げる・・・はあ！」

ついには、訳の分からぬ言葉まで発しあじめた。どうしたんだろ  
うか？

「グルル・・・浅はかな娘どもだ。我があの程度で死ぬとでも思つ  
たか！」

「どういうことだ？俺は、男・・・そうか！

「リン！」

俺は、気付けば俺は走っていた。勿論、ライジの時に集中力も判断  
力もかけてしまっていたかもしれない。でも、気付かぬうちに走つ  
ていた。俺は、まだまだ未熟だ、と感じながら・・・しばらく無  
我夢中で走っていると、リンが倒れていた。理由は、まつたく分か  
らない。

「・・・」

俺は、ただ呆然と何があつたが状況把握ができず、ボロボロと涙を  
ながしてしまった。

「くつそ・・・」

ただ、その一言だけ呟いた。

「その後、京子が祈祷を背負つてここにきてこの状態だ。」

「私はね、『巻物』を詠みきつた後にリンの場所に向かつたんだ。  
京子は、いつもの口調でいつもどおりに答えた。

「だけど、祈祷が倒れてたんだ。その時には、傷だらけで血が止ま  
らない状態だつたんだ。」

「・・・」

リンの目に生氣は、見えなかつた。

「多分だが、今の状態では祈祷に明日を生きられる力は見えない。」

俺は、無表情で答えた。

「そ、そんな・・・！」

リンは、この世が終わるような顔を見せた。

「今の状態では、だ。せめて、村さえ見つけられれば話は変わる。」「じゃあ・・・！」

「この森のどこかに村があるはずだ。」

「え？でも、この森自他一日歩けば抜けられるほど小さいんじゃ？」「それは、一番短い距離で森から抜けた時の話だ。もしも、この森を抜けても、小さな空港しかない。そんな所よりも村の方が助かる確率が確実に高い。」

国というまとまりがなくなつた現代では、自分の身は自分で守るのが基本。そんな現代で、医療施設が無いといつ事は、消滅を意味する。

「30キロメートルに一つの村があるということ原則を元にして、俺らの街を原点とすると・・・。」

そういうて、俺は地面に枝を使って円を書いている。

「でもつて、この森は、歩きっぱなしで7時間程度で抜けられる。俺らの時速は、だいたい4キロほど。だから、一直線だけでも28キロは最低でもあることになる。で、この森は長方形になつてているから・・・。」「・・・・・・」

「円に入らない部分に村がある可能性が高い。」「キジ、質問があるんだけど。」「うん？なんだ？」

「なんで、30キロに一つの村があるって断言できるの？」

「それはな、一日に村を行き来するにはもつてこいの距離だからだ。」「

「？？？」

なおも、頭にハテナマークのリン。

「いいが、30キロの間に村が出来てしまつと如何しても、お互

を干渉してしまつんだ。だから、一歩いは歩いてかかる距離を置いているんだ。」

「でも、あるとは言い切れないじゃない。」

「普通は、そななんだがな。残念なことにこゝは『森』だ。いわば、食材の宝庫。そこに人が集まらないなんて不自然だ。」

「でも、人がこの森にきてないかもしないでしょ？『魔物』がいたわけだし。」

「『魔物』がいるからといって住む場所を選ぶとは思わない。」

「・・・・・」

いつもの如く俺らは数分睨みあつ。いつもいつも、何が気に入らないんだ？

「わかつた、キジ。」

今回は、リンが折れたみたいだ。

「でもでも、夜動く事は、自殺行為なんだよ？」

「大丈夫、京子もいるし、それにお前だつていう。大丈夫だつ。」

「・・・しかも、見つかるかわからないんだよ？」

「あると信じれば見つかる。」

「・・・・・」

いつもの如く俺らは数分睨みあつ。なんだか、既視感が・・・！

「わかつた、キジ。」

「・・・・・」

京が不思議そうだった。

「・・・さつきリンが言つたとおり夜動くのは自殺行為。気を鋭くし、集中していこう。」

「おつー！」

俺らの搜索が始まった。

夜の森は、予想以上に怖かった。ていうか、怖すぎる。道の中にまた未知な道。いつも通っている森には見えなかつた。「怖っ！」つて思い切り叫びたいのを我慢して進む。後ろの木々がガサガサっと音を出すたびに振り返つてしまつ。キジの提案で、一列に並びながら進むことになつた俺たちは、どうも寂しさと恐怖でいっぱいのようだ。やはり、祈祷がないことで会話が全く弾まない。なんていうか、皆が皆、靈が見えているような恐怖がある。並ぶ順番は、京子、俺、そして祈祷を背負つたキジという順番だ。背後に備えて俺が風の膜をはつた。この膜が破れたら、敵の接近が分かる手筈になつていい。

「なあ、京子。」

「『なあ』じゃなくて『ねえ』でしょ、京子ちゃん。で、何？」

俺の相方は、なぜか俺の言い方をわざと直してきたが、日常茶飯事なので無視する。

「怖くない？」

「怖い。」

会話終了。どうすればいいか、教えてくれ。だいたい、キジも何か考えたような面おもてしているから、とてもじゃないが話しかけられないし！そもそも、もう何時間か歩いているのに、何も見つからないつてどういうことだ！

「・・・こりらで、一休みしよう。」

「ダメよ、キジ。ここで、休んだら助けられない。」

リンが珍しく緊張感のある声を出す。

「俺がすでにやばいんだ。」

そう言つて、かなりぐつたりしたような顔をする。確かに、やばそうだ。

「わかつたわ。」

リンもしぶしぶ、OKした。俺らは、枯葉と木の枝を集め適当に火を起こす。すると、キジが口を開いた。

「リン、夜明けまで、あと3時間程度だ。もしかすると、タイムリミットに間に合わないかも知れない。」

「そんな・・・！」

「重症で、傷は縫つて塞いだが、輸血が無い状態。そして、しつかりとした栄養分を与えられていない。このままでは、祈祷の体力でももたないかも知れない。今の状態を見て分かるように、顔が真っ青で、呼吸はしているものの、生きているのがやっとだ。正直、覚悟はしといた方がいいかも知れない。」

「・・・・・」

「・・・・・」

思つた以上にヤバイ。これは、悪い冗談でもなさそうだ。このやばさ、どちらにしても助かる確率は、低い。

「・・・賭けに出でみるか。」

キジが、急にハツとしたようになつた。

「賭け？」

元々、これも賭けでは？

「今から、京子が、『風』を使って俺と祈祷を吹つ飛ばすんだ。」

「！」

「そ、そんな事したらキジが死んじゃつかもしないよ！」

「その時は、その時だ。」

「そんな・・・！」

すごい、キジは意外な顔をしていた。なんというか、依頼を成功させよう、と言う顔。そんな感じ。

「幸い、南西に『テンジースアイル』と言う街がある。そこに居たほうが生還する確率が高い。」

キジの目に迷いは無かつた。『テンジースアイル』と言う街は、台湾地区の南西にある。商業の盛んな街で発展していく、とても巨大である。アジア最高峰の街で、台湾地区の半分は、その地域になっている。

「わかった。」

俺と、リンが同時に言った。その後、俺は爆発させるイメージを頭の中に叩き込む。

「準備完了。」

俺は、静かに冷静を装った。

「・・・いいか、リン、京子。俺らは、ここから吹っ飛ばして、南に飛ばすんだ。そして、リンたちは、空港にすぐに向かえ。出来れば、オーストラリア地区の『レイトール』に向かって欲しい。」

『レイトール』は、小さい街だが近くにたくさんの空港を所持し、オーストラリア地区有数の場所となっている。

「じゃあね、キジ。」

「・・・ああ。」

「元気でな。」

「お前こそな。」

キジは、ベルトで祈祷を固定し、リンと俺はリンの土に固定された。「破!!!!」

俺は、精一杯の力で、キジたちを吹っ飛ばした。それに答えるように森が破壊され、木々が押し倒されていくのが感触で分かった。が、止められなかつた。心の中のモヤモヤが、晴れずその憂さを払うために、破壊し続けた。

「京子ちゃん・・・？」

その時のリンの顔は鮮明に覚えている。びっくりしていたところよりも、訳の分からぬといふ顔をしていた。

「・・・」

俺は、終始無言だった。

「どうして・・・？」

リンは、俺に何をしたいのだろう？俺の顔を触つてきた。

「どうして、泣いているの？」

そうリンに問われて初めて分かつた。涙が頬を伝つていたのだ。

「・・・」

その瞬間、このモヤモヤの正体が分かった気がした。

この世はなぜ生まれたのだろう。

最初は、そう思った。でも、この世界に生まれて良かったと思った。  
誰かを救えるかもしれない力が自分の中にあったのだ。それだけで、  
よしとしようではないか。苦労？そんなものどうした？俺は、決め  
た。

精一杯、俺の仲間を救おうと。

精一杯、俺の仲間を大切にしよう。

精一杯、俺の仲間と生きよう。

そして、元気な姿で再開しよう！

また、四人で笑いながら・・・。

## 序章・始まり（下）（後書き）

こんばんは、作者の封雷光です。

今回で、序章は終了です。次から、新章になります。

まあ、まだ次の章の構成は全く考えていないので、「こまりましたか・  
・・。まあ、その場で考えますw（ オイ）さてと、次はキジとラ  
イジを基準にお話を進めていきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8170e/>

---

世界の利、僕の利

2010年11月30日03時59分発行